

農家、企業、大学、そして都市住民が手を取り合って

「みんなにとって貴重な農地と里山はみんなで作らないと守れない」

NPO法人子ども環境活動支援協会は、「食」に関連する企業の社会貢献(CSR活動)として農地での協働活動を提案。都市近郊における農地減少や後継者不足といった問題、都市生活者の農体験の欠如による食や農への関心の希薄化といった社会的課題に対して、農家、企業、市民、大学がお互いの持てる「力」を合わせることで解決の糸口を探る。参加する都市住民からは、確かな手ごたえが。

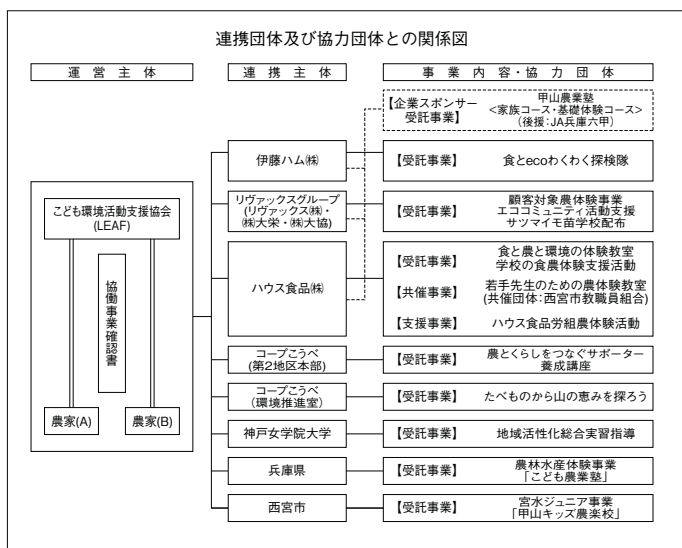
NPO法人 子ども環境活動支援協会

取組主体

- 名称：NPO法人 子ども環境活動支援協会
(LEAF: Learning and Ecological Activities Foundation for Children)
- 担当窓口
担当課(者)：事務局長 小川 雅由
住所：兵庫県西宮市甲風園1丁目8-1 電話：0798-69-1185
FAX：0798-69-1186 E-mail：kodomo@leaf.or.jp
- 団体等の属性：NPO法人
- 構成員数：個人会員 157名 企業会員65団体(2011年1月末現在)
- 活動内容を紹介するHPアドレス：<http://www.leaf.or.jp/>
- 連携団体及び協力団体
属性：農林漁業者、農林漁業に関する団体、学校(神戸女学院大学)、民間企業
内訳：下図参照



田んぼの生きもの探し



取組地域及び地域の特徴

取組地域：兵庫県西宮市

地域の特徴：

人口の増加が著しい西宮市にあって、鷲林寺地区は六甲山系の東端にある甲山の西に位置し、森林、田畑の残る貴重なエリアとなっている。しかし、その田畑が農地以外の用途に転用されるケースが増え、里地里山の地域特性が損なわれてきている現状がある。

当協会では、地元農家、市民、企業、行政の連携により、甲山一帯を「甲山グリーンエリア」と

して「生物多様性」のある自然環境を保全するとともに、「環境学習都市」にふさわしい学びの場として活用している。

取組内容

(1)目的(目標)

多くの市民は野菜や米の栽培経験がなく「食べもの」への関心が薄れている現状と、年々減少していく都市近郊農地の保全という課題をつなげ、これらを解決する具体策として、企業と協働し事業を展開。

「食」に関連する事業所の社会貢献(CSR活動)としての農地での協働活動を提案し、年間を通じた市民

の農体験活動への支援と企業主催の食農体験イベントを提供。

活動の基本姿勢を、

- ・「食農教育」を「持続可能な発展のための教育」としても位置づける。
- ・さまざまな主体や活動をつなぐことで経済基盤の強化にも結びつける。
- ・「農に携わる仕事」を若い世代に担ってもらえる環境づくりを行なう。

とし、事業を通じて、市民の「食」や「農」、「環境」への関心を向上させるとともに、課題教育となりがちな「食育」や「農業教育」、「環境教育」を、体験的な活動を通じて統合化し、持続可能な地域づくりを進めていくことを目標にしている。

(2) 取組開始時期・経緯

- ・平成18年 「農から学ぶ自然対話力育成 指導者養成セミナー」を実施。
 - ・平成19年 小学校を対象に環境学習プログラムの場として農体験活動を受け入れ。
 - ・平成20年 企業グループと地元農家、NPOの協働事業で進める「農地保全プロジェクト」を、企業、市民、大学などと連携し、①基礎的に学べる市民対象の農業塾、②企業主催の「食農体験イベント」、③神戸女学院大学「地域活性化総合実習指導」、の三つの事業を実施。
 - ・平成21年 「LEAF甲山農地プロジェクト」として企業、市民、大学などと連携し、三つの事業を継続。
 - ・平成22年 連携する農家を増やし、若手先生を対象とした全11回の農体験プログラム、阪神間の小学校3年生の環境体験事業をはじめとした農体験を実施。
- 生活協同組合と「農とくらしをつなぐサポーター養成講座」を実施。

(3) 対象作物

米、野菜

選定理由：農に興味を持っている市民でも米づくりの経験者は少なく、農の原点である米づくりは必須事項と考えた。また、食育実践も含めたプログラムであることから、各季節に応じた食材を栽培する必要があった。

(4) 具体的な取組内容

市民の農体験活動支援事業「甲山農業塾」

- ・家族・グループコース
1年間を通して、週末に農業体験ができるプログラム
- ・農業基礎体験コース
農業の基礎を学ぶことができる年間プログラム

企業主催の食農体験イベント

京阪神地域の家族を対象とした、食や農に関する体験型のイベントを開催。

神戸女学院大学「地域活性化総合実習」

農地をフィールドとした体験実習プログラムを学生が企画運営。

生活協同組合コープこうべとの「農とくらしをつなぐサポーター養成講座」

地域住民や学校が、都市（消費）生活と里山里地環境を結び付けた実践活動を行なう際の支援者を育成するための年間プログラム。

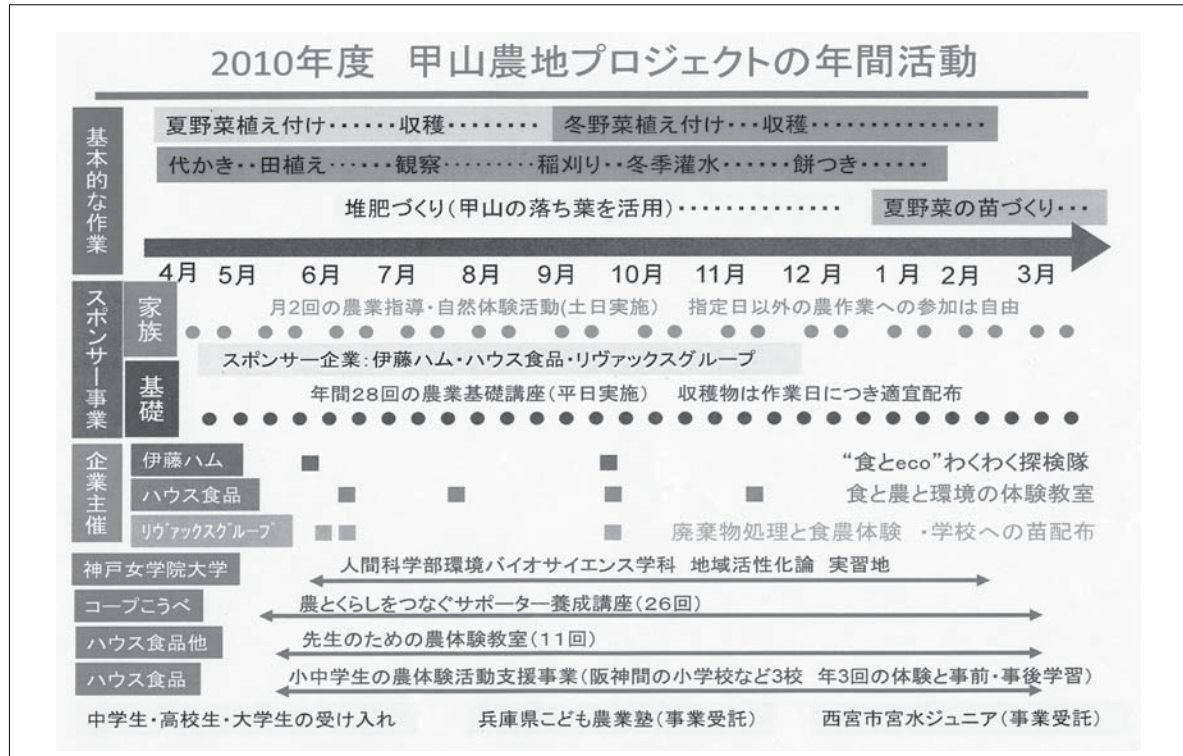
企業・教職員組合との「若手先生のための農体験教室」

米や野菜づくりなどの農作業を先生や保育士が直接体験する年間プログラム。



野菜の収穫

(5) 年間スケジュール



(6) 参加者数・属性の実績及び推移

2010年度 甲山農地活動実績予定数

実施主体	活動名	詳細	実施回数	延人数
企業スポンサー受託事業 甲山農業塾	家族コース(土)	16組(1家族3~4名)	24	1344
	家族コース(日)	21組(1家族3~4名)	24	1776
	基礎体験コース		28	448
	収穫祭(全体会)		1	70
伊藤ハム(株)	食とecoわくわく探検隊	2回	2	111
リヴァックスグループ	顧客・社員対象農体験活動	3回	3	95
	エココミュニティ活動支援(春風)	夏野菜収穫	3	120
	サツマイモ苗学校配布	伊丹市:小学校(7校)、幼稚園(1園)		0
ハウス食品(株)	食と農と環境の体験教室	11組	3	117
	豊穡祭(2年間の参加者対象)		1	63
	学校の食農体験支援活動	西宮市:小学校5年(1校)、適応指導教室 尼崎市:小学校3年(1校)	19	969
	若手先生のための農体験教室		12	132
	ハウス食品労組農体験活動		1	36
コープこうべ(第2地区本部)	農とくらしをつなぐサポーター養成講座		26	442
コープこうべ(環境推進室)	たべものから山の恵みを探ろう	親子17組	5	235
神戸女学院大学	地域活性化総合実習指導	学生+イベントでは市民参加	8	120
	同好会農業研究会	学生	3	60
兵庫県	農林水産体験事業「こども農業塾」		6	240
西宮市	宮水ジュニア事業「甲山キッズ農楽校」		7	154
合 計 数			176	6532

(7)経費

運営資金の構成と収支状況

年間事業費……約1330万円

資金調達状況……企業等協賛金	64%	(伊藤ハム、ハウス食品、リヴァックスグループ、コープこうべ、神戸女学院大学)
受益者負担	26%	(参加費)
自主事業	10%	(受託事業、苗販売)

支出項目……農家への事業費配分費、LEAF職員人件費、事業費

収支状況……2010年度は概ね過不足が生じない予定

参加費

市民の農体験活動支援事業「甲山農業塾」

家族・グループコース	6万6000円	年24回
農業基礎体験コース	4万8000円	年28回

企業主催の食農体験イベント

農とくらしをつなぐサポーター養成講座	2万4000円	年26回
若手先生のための農体験教室	5000円	年11回

課題及び対処方法(ポイント・工夫)等

●関係者(団体)との連携の経緯

農地転用による田畑の減少に対して、農地を残しながら市民の農体験も可能となる方法として企業との連携を模索し、事業に賛同いただいた3社との事業連携と大学における新たなカリキュラム開発に際して農地での活動を提案し認められたことから、こうした企画に賛同いただいた農家と協働事業として開始した。その後、他の農家や事業所との連携へと広がっていった。

●連携を進めるに当たっての課題と対処方法(ポイント・工夫)

- ・農地使用に関しては協働事業という位置づけで、LEAFと農家との間で「協働事業確認書」を交わしている。そのような形で農家とともに協働できれば、広く事業展開することができる。
- ・スポンサー企業のCSR活動としての事業展開であるので、農地使用に関してコンプライアンスが必要。

●コーディネーターの存在の有無

- ・LEAF自体がコーディネーターであり、現場での責任を負う。
- ・農家やスポンサーとの関係は事務局長及び理事が対応する。

●ほ場での運営の課題と対処方法

- ・水田の水管理は農家が担う。
- ・月1回、農家とスタッフとの会議を行ない、作物の状況や今後の栽培や管理について農家から指導を受ける。
- ・現場は、専任のスタッフ1名、アルバイト1名の他、サポーター7名、ボランティア10～15名で運営。

●安全管理

- ・圃場にあるビニールハウス内でセミナーなどを開催、また農具などを保管。
- ・トイレは近くの施設のトイレを使用するか、仮設トイレを2ヶ所設置。
- ・水道を引き、収穫した野菜や手足を洗う場所を確保。

これまでの成果

- ・都市近郊における農地減少や後継者不足といった問題、都市生活者の農体験の欠如による食や農への関心の希薄化といった社会的課題に対して、農家、企業、市民、大学、NPOなどの各主体が、お互いの持つ「力」を合わせることで解決の糸口が見えてきた。過疎地における問題への直接的な対応策ではないかもしれないが、より多くの都市住民が「食」や「農」、「環境」への関心を持つこと抜きには社会全体への広がりはない。その意味で都市近郊での取組みの重要性を改めて確信できた。
- ・幼児から小学生、中学生、高校生、大学生、社会人、年配者など、各世代の参加者を受け入れ、「学び場」となった「農地」の貴重さを関係者が実感し合えたことは、大きな成果だった。
- ・森林保全や環境教育ともつながり、落葉堆肥でつくった地場産野菜苗が、地域の学校や保育所で活用されるといった活動の広がりも生み出した。



種まき

今後の構想、課題

- ・農作業を体験することにより、農林漁業の抱える問題点を見て、感じ、環境問題も含めた、第一次産業を理解する市民を増やしていきたい。
- ・協働する農家の増加と圃場の拡大。
- ・個々の農家によって、栽培や管理、経営に対する考え方が同じではないので、協働する農家が増えれば、調整が必要となる。
- ・農業基礎体験コース修了者が、次のステップとして自立して農作業を行いたいという希望があっても、圃場等の受け皿がないことが課題。

その他

- ・若手先生のための農体験教室の募集について
募集に当たって教育委員会に協力を求めようと考えたが、行事が休日に行なう内容であったため、当協会の団体会員である教職員組合を通して募集し、12名の参加者があった。
- ・農業基礎体験コース修了者は、ボランティアとして事業に関わることも可能。

NPO法人 こども環境活動支援協会

みんなのコメント集

取組の
実践者

“活動がこれからの都市住民の暮らしのあり方にも
つながりは始めている”

LEAF農業専従スタッフ

「甲山農地での活動は、農体験に留まらず、さまざまな分野とのつながりを学んでもらえる活動になっていると思っています。食とのつながりはもちろんですが、この立地を生かして森林や生きものとのつながり、そして、これからの市民の暮らしのあり方ともつながるものへ進化しつつあるように思います。また、都市近郊にあることから、たくさんの方々が訪れてくださいます。幅広い世代が関わることのできる活動であること、そして、次代を担う子どもたちの貴重な体験の場になっていることをうれしく思っています」

参加者

“週ごとに変化する農地に驚き!”

「実家が農家なのですが、機械化が進んだこと、進学を重視したことから日常の農作業のことは知らずに育ちました。都会で子どもを育て始めて、自分が育ってきた環境から得ていたものの大きさを感じました。セミナーに参加して、あらためて両親の大変さを思い、感謝の念が湧き起こるとともに、子どもとも同様の体験を共有できたことは本当にありがたいと思っています」

「週ごとに変化する農地の様相に驚きがありました。収穫した野菜を前にして、汗する者のみが味わうことのできる原始的な喜びを経験することができました。グループによる共同作業、しかも週に一度のうわべだけの作業は実際に農村で行なわれている過酷な農作業とは比べるべくもありませんが、わずかの経験からも、農村社会では“自然の力との折り合いを付けていくには際立った個性よりも和の精神が、創造力よりも豊富な経験が必要とされているのであろう”ということが実感できる経験でした」

「何もかも新鮮で、毎日があっという間に過ぎました。食の問題も少しは理解できるようになり、自然に触れながらの生活は今後も何らかの形でつづけたいと思うようになりました。田んぼや畑で生きる生きものにも関心を持つようになり(小学生並み……)、生命ということにも関心を持つようになりました(例えば、ヤゴが羽化してトンボになるシーンなど)。“農”の多様さに改めて驚かされています」



稲刈り